

2017年1月14日

第131回山口西田読書会（2017年1月14日）
第130回（2016年12月24日）のプロトコル
参加者 13人（讃内さんが初参加）

【テキスト】西田幾多郎『善の研究』第4編第2章「宗教の本質」第3段落「また我々はこの自然の根柢において」より、第4段落の最後までを読了した。

1) 第1-3段落前半を振りかえる

宗教を神と人との関係（すなわち宇宙の根本と個人的意識の関係）とする第2章「宗教の本質」において西田は、神と人が本質的に異なるところがない（神人同性である）ことをまず述べ（第1段落）、続いて有神論と汎神論を取り上げている（第2段落）。そこでは万物をそのまま神とする素朴な汎神論や超越的な神が外から働きかけてくる有神論を不十分なものであると指摘している。

第3段落の前段で神意は「自然の理法あるのみ」であるとし、神は「宇宙の内面的統一力でなければならぬ」と述べて、有神論が求める神の人格性も内面的統一力の人格的意義を意味していなければならないと主張している。

2) 第3段落後半（「また我々はこの自然の根柢において」以降）

ここで西田は自然の根柢（宇宙の根本、神）がそのまま自己（個人的意識、人）の根柢であるとし、個人的意識を自然の根柢の部分であるとする。全体と部分の関係であるから時間的、空間的には独立であっても同一体（神人同体）であると述べている。

3) 第4段落

宗教は神人合一であることをよく理解することであり、それは「意識の根柢において自己の意識を破りて働く」宇宙的精神（自然の根柢=宇宙の根本）の顕われであるとしている。人は「内面的再生」を通じて直に神を見、これを信じ、自分の生命が本来持っている力を感じる。すべての精神活動の根柢には統一力が働いており、それが自己であり、人格であるとしている。その統一力を信じることは理性に反することではなく、知を尽くした上で信じないではいられない状態であると述べている。

3) 哲学的問い

意識に内面、外面の区別があるのか。（区別はほんとうに必要か）

※内面、外面が視覚的な外観（行為とか見た目）でないという意味で用いられている箇所は別として「自己の意識を破りて働く堂々たる宇宙的精神」のように意識を破る意識としての根柢、根本のありかとしての内面とはなにか。

（報告、岡部）